

AJ フォーラム 17

アフガニスタンの文化遺産 – 日本の貢献 –

日程：2009年7月18日（土）

場所：国士舘大学梅ヶ丘校舎 34号館 A-308教室

講師：前田 耕作（アフガニスタン文化研究所 所長）

人間が生み出したもので、保護し、後世に伝えるにふさわしい文化的な財産はどの国にも、どの民族にも存在します。

長い間戦火の中にあったアフガニスタンは、歴史上まれにみる多くの難民を国外にだし、野も山も荒れ果て、大切な文化財も数知れず海外に流失してしまいました。かつては文明の十字路にあって多彩な文化を受け入れてきたアフガニスタンには、それでもなお有形・無形の誇るにたる文化財が多く残っています。

現在はイスラームの信仰深い国ですが、かつてはペルシアやギリシア・ローマの文化が根づき、仏教も大輪の花を咲かせた国でもありました。どんな異なった文化も排除することなく、互いに吸収し合って独自の文化を築き上げてきた国がアフガニスタンであったともいえましょう。

ヒンドゥクシュと呼ばれるアフガニスタンのまん中を東西に走る大山脈の懷に抱かれているのがバーミヤンという仏教遺跡です。東と西に大仏を刻み、その間に七百五十もの仏堂を彫りこんでいるこの仏教遺跡は、人間と自然のいとなみとがみごとに融けあった遺跡で、その壮大な景観からしてまこと世界遺産の名に恥じません。

玄奘三蔵が七世紀に訪れた頃には、大仏は金色に輝き、仏堂には灯明が灯り、読経の声が満ち、谷には香の馥郁としたかおりが漂っていました。人びとにはさながらこの世に出現した浄土（楽園）のように思えたことでしょう。

そののち、バーミヤンにやって来たイスラーム教徒たちも、大仏の顔を削り取っただけで、西の大仏をお父さん、東の大仏をお母さんと呼び変えて、それから千四百年ものあいだともに暮らしてきたのです。心ない人びとによって、2001年3月、世界に誇るべき二つの大仏と、わが国の法隆寺の壁画の源流ともいえる素晴らしい壁画の大部分が失われてしまいました。

しかし、2003年から日本の専門家たちが、ドイツやイタリアや現地アフガニスタンの専門家たちと力を合わせて、この大遺跡の保存・修復の作業を始めました。木っ端微塵となった壁画の断片、崩れ落ちた大仏の石塊を一つ一つ拾い集め、それらをジグゾーパズルのように繋ぎ合わせ、もとの姿に戻そうと気の遠くなるような作業に挑んでいます。地下に未知の埋蔵文化財を探る考古学者たちも汗を流しています。人類共通の文化の記憶を取り戻そうとするこの国際的な協働が、かならずアフガニスタンに平和を定着させる礎になると信じて。

そしてなにより、復興途上にあって苦闘するアフガニスタンに注がれるみなさんの温かいまなざしこそ、人びとに新しい国の再建に向けての希望と勇気を与えるものとなるでしょう。